

三歳児の興味と理解に関する研究

—劇あそびを通して—

研究第8部 星美智子
共同研究者 清水玲子
(東京成徳短期大学)
研究協力者 小林千鶴子
(幼児グループ)
釜谷青子
吉田正子

I 研究目的

三歳児保育における劇遊びを通じ、三歳児の興味、理解の特徴をとらえることを目的とする。同時に、興味をひきだし、理解を深める保育方法についても考察する。

II 方法

〔材料〕

1)《大きな大根》、《ブレーメンの音楽隊》の二種類の物語

2)この二種類の物語の選択の理由

①話の筋がわかりやすい。②動作が単純である。③くり返しが多いところが三歳児に喜ばれるのではないか。④登場人物の数が、数人なので適当ではないだろうか。⑤登場人物の役割が明確である。⑥登場人物が一度登場したら、途中で退場したり、他の役と著しく異なる動作をしたりせず、最後まで皆一緒に行動する。⑦主役・脇役の別がない。⑧これまで数年間の保育で、子どもたちに喜ばれてきた。

3)あらすじ

《大きな大根》

おじさんが、畑に大根を作る。種を蒔き芽が出、大きくなり、収穫期になって、おじさんは、大きくなった大根を引き抜こうとするが抜けない。おばあさん呼び、一緒に引っぱりが抜けない。子どもの太郎呼び、犬のポチ呼び、猫のミケ呼び、ねずみのチュウ太を呼んで力をあわせてようやく抜けたが、それはそれは大きな大根であった、という話。

《ブレーメンの音楽隊》

年老いて働けなくなり、ごはんがもらえなくなったロバが、ブレーメンへ行って音楽隊に入れてもらおうと考えて出かける。途中で同じ境遇の犬、猫、おんどりと順に出会い、皆一緒に行く。途中で夜になり、森の中に一軒家を見つけるが、中ではどろぼうたちが酒盛りをしている。動物たちは相談して、ロバ、犬、猫、おんどりの順に背中に乗り、窓の外から大声で鳴いて、どろぼうたちを恐がらせて追い出す。皆で御馳走を食べて寝ているとどろぼうの子分が様子を見にもどってくる。四匹はどろぼうの子分を散々にやっつけ、どろぼうたちは遠くへ逃げてしまい、その後、4匹はその家で楽しく暮した、という話。

〔対象〕

都下団地内愛育幼児グループの三歳児2クラス(A、Bとする)約35名ずつ。(週二回、三時間ずつの保育)

〔手続き〕

- 子どもに、なりたい役を選択させ、クラスの全員で参加する方法で行なう。
- 劇遊びへの導入の方法は次の通りである。
 - 絵本、紙芝居、ペープサートを用いて話す。
 - 何も用いずに、保育者が、言葉や身ぶりで話す。
 - 子どもたちがなりたい役の顔を描いてお面を作る。
 - 役ごとに分かれ、保育者が中にはいつて劇遊びをする。
- 対象の2クラスに、それぞれ二種類の劇遊びを同じ手続きで行なう。
- 劇遊びに使用する道具は次の物である。

《大きな大根》

- 大根……ごさを巻いて縛ったもの。敷布を縦長に巻

いて縛り、先端に葉として緑のテープを数本つけたものの二種。

②各登場人物のお面
《プレーメンの音楽隊》

- ①カステネット（動物役全員が持つ）
 - ②森の中の家……衝立で囲う。
 - ③どろぼう……ふろしき（頭にかぶる）
 - ④各登場人物のお面
- e 観察は、観察者1名と保育者3名とが行なう。

〔観察期間〕

1974年4月～1976年3月

Ⅲ 実践および結果

《大きな大根》

〔登場人物〕

子どもの選択する役の人数は、クラスにより、また同クラスにおいてもその日によって多少の移動はあるが、だいたい傾向は、第1表に示す通りであった。

第1表 《大きな大根》役の子どもの選択

—ある日を例にとって—

おじいさん	3名
おばあさん	4名
たろう	2名
ボチ	9名(全員男子)
ミケ	10名(ほとんど女子)
チュウ太	4名

犬と猫に人気が集まり、他はどの役もあまり選択されていない。犬の役はいつも男子がほとんどで猫の役は女子がほとんどであった。

〔劇遊びへの導入〕

①絵本、紙芝居、ペープサートを用いて話す。

種を蒔く場面で、保育者が「バラバラッ」と言いながら手で蒔くしぐさをすると、子どもたちも一緒に「バラバラッ」と言いながらしぐさを真似る。動物の登場ごとに大根を引っぱるかけ声の繰返しに反応し、数人が保育者と一しょに「ヨーイショ、ヨイショッ!」と言う。大根が抜ける場面は、絵には、大きな大根と、抜けたはずみで転んでいる登場人物たちが描かれており、保育者も、「あ、抜けたー」「スポーン!」など大声を出して工夫しているが、どのクラスも、あまり反応を示さなかった。時間は約6分30秒。

②何も用いずに、保育者が、言葉や身ぶりで話す。

①と同様、保育者が種を蒔くしぐさをすると、子どもたちも一緒になって「バラバラバラ」と言いながら、しぐさをする。大根を引っぱるくりかえしの部分も、保育者が、調子よく「ヨーイショヨイショッ」とかけ声をかけながら引っぱるしぐさをして子どもたちを促すと、子どもたちも大きな声でかけ声をかけながら引っぱるしぐさを喜ぶ。動物の登場で、保育者が鳴き声を入れて話すと、子どもも自分から鳴きはじめ、犬の登場では床に這い、犬になったように歩きまわっては「ワン、ワン、ワン」と吠えるのに夢中になる、といった反応も見られた。時間約9分。

③なりたい役のお面を描いてお面を作る。

保育者が、物語を思い出させ、登場人物を挙げながらなりたい役の顔を描く。自分のなりたい役と無関係な顔を描いたり（仮面ライダーなど）違ったもの（自動車）を描いてしまう子も数人いる。

〔劇遊びへの展開〕

場面ごとに、保育者の行動、働きかけと、子どもの行動とを整理し、第2表に示した。

第2表 《大きな大根》劇遊びへの展開 約7分

場 面	保育者の行動・働きかけ	子どもの行動
①おじいさんが、畑に大根の種を蒔く	保育者T おじいさんたちの中へはいり「バラバラバラッ」といいながら種を蒔く。 保育者S, M は他の役の子どもの中にはいつてもみている。	おじいさん役の子どもたち、「バラバラバラッ」といいながら種を蒔く。みている子どもたちがおもしろがって笑う。
②大根が育つ	保育者T 雨が降ったり日が照ったりすることを説明しながら、芽が出てだんだん大きくなる様子を動作で示す。	おじいさん役の子どもたち、芽がでて大きくなる様子をいっしょに動作で示す。
③おじいさんが大根を抜こうとする	大根におじいさん役の子どもといっしょにつかまってかけ声をかけてひっぱり「ヨーイショ、ヨイショ」とくりかえす。	おじいさん役の子どもたち、大根につかまってひっぱる動作をする。他の子どもたちも、かけ声をかける。

場 面	保育者の行動・働きかけ	子どもの行動
④おばあさんと呼ぶ おばあさん登場して、一緒に大根をひっぱる	保育者S おばあさん役の子どもたちの中にはいって、いっしょに登場し、おじいさんの後に子どもたちがつかまるのを手伝い、いっしょにかけ声をかけてひっぱる。 保育者M 他の役の子どもたちがいっしょにとびだしていこうとするのを制している。	おじいさん役「オバアサーン！」と呼ぶ。 おばあさん役の子どもたち、「ハイ」と返事をして登場し、いっしょにかけ声をかけてひっぱる動作をする。他の子どもの後につかまって並ぶことがなかなかできず、大根のところへ出ようとする。 他の役の子どもたち、おばあさん役の子どもたちといっしょに出て行きかけて、保育者に、とめられる。
⑥たろうと呼ぶ たろう、登場して、皆と一緒に大根をひっぱる	保育者M たろう役の子どもたちの中にはいって一緒に登場し、子どもたちが並ぶのを手伝い、かけ声をかけていっしょにひっぱる。 保育者T まだ登場しない子どもの中にはいる。保育者Sは大根をひっぱる子どもたちの中にはいる。	おじいさん役、おばあさん役が「タロウヤーイ」と呼ぶ。 たろう役の子どもたち「ハイ」と返事をして登場し、いっしょにかけ声でひっぱる動作をする。並ぶことがなかなかできず、保育者に指導される。
⑥犬のポチと呼ぶ ポチ、登場して皆と一緒に大根をひっぱる	保育者T ポチ役の子どもたちの中にはいり、一緒に登場する。子どもたちが並ぶのを手伝い、かけ声をかけて大根をひっぱる。 保育者S まだ登場しない子どもたちの中にはいる。	登場している子どもたち全員で「ポチーッ」と大声で呼ぶ。 ポチ役の子どもたち、「ハイ、ワン、ワン、ワン」と登場する。這って犬らしく登場する子どももいる。 たろうの後になかなか並ばず、大根のところへ行こうとして、保育者にとめられる。 皆いっしょにかけ声をかけて大根をひっぱる。
⑦猫のミケと呼ぶ ミケ、登場して皆と一緒に大根をひっぱる	保育者S ミケ役の子どもたちの中にはいり一緒に登場する。子どもたちを並ばせ、「ヨーイショ、ヨイショ」のかけ声で一緒に大根をひっぱる。 保育者M ねずみ役の子どもたちの中にはいる。	登場している子どもたち全員で「ミケーッ」と大声で呼ぶ。 ミケ役の子どもたち「ハイ、ニャアオ、ニャオ」と登場する。這ってそろりそろりと登場する子どももいる。 大根の後の人数がたいへん多くなり後に順序よく並ぶことがなかなかできない。かけ声で、はじめて全員が一緒にひっぱる動作になる。
⑧ねずみのチュウ太と呼ぶ チュウ太、登場して皆と一緒に大根をひっぱる	保育者M ねずみ役の子どもたちの中にはいり、一緒に登場する。子どもたちといっしょにかけ声をかけて大根をひっぱる動作をする。	登場している子どもたち全員で「チュウターッ」と呼ぶ。 チュウ太役の子どもたち「ハイ、チュウ、チュウ」と登場し、「ヨーイショ、ヨイショ」のかけ声で、全員一緒に大根をひっぱる動作をする。並び方は乱れているが、かけ声のくり返しでは声をあわせ、動作もそろろう。
⑨ようやく大根がぬけた！	保育者T.S. かけ声を大きくしてから「あ、ぬけたーッ」と大声でいってうしろに大きくそる。保育者M大根を、まん中にひきずり出す。	かけ声までは全員そろっているが、「ぬけた」には声をあわせず、まん中にできた大根に触ろうと、子どもたち全員が大根のまわりに集まる。
⑩大根をかついで、ひとまわりする	保育者T.S. 大根をかつぎ、子どもたちに触れるようにして「ワッショイ、ワッショイ」と声をかけて保育室をまわる。 保育者M とりのこさがれがちな子どもを促し、いっしょにまわる。	大根に手をかけ、「ワッショイ、ワッショイ」と声をかけて走ってまわる。
⑪大根をみんなで食べる (原作にはない場面)	とまって「みんな、この大根何にして食べる？」ときき、答をうけられて食べる動作をする。	保育者の問いに対し「オミソシル！」「オデン！」「カレー！」など、次々に食べるものを言っ、みんなで食べる動作をする。全員うれしそう。

《ブレーメンの音楽隊》

〔登場人物〕

子どもたちになじみのないろばについて、Bクラスでは、特別にとりあげて説明し、一度全員でロバの絵を描いてみる、という指導を行なった。Aクラスでは、特にを行なわなかった。その結果、やはり日により違いはあるが、第3表に示すような傾向が生じた。ていねいにロバを説明したBクラスでは、ロバ、犬、猫が同じくらいの人数になり、特に説明しなかった7クラスでは、犬と猫にのみ人気が集まっている。

第3表 《ブレーメンの音楽隊》役の子どもの選択
—ある日を例にとったクラスの比較—

	Aクラス	Bクラス
ロバ	4名	10名
犬	9名	12名
猫	16名	11名
おんどり	4名	3名
どろぼう	0名	0名

犬は男子が多く、猫は女子が多い。

どろぼうの役については、2クラスとも、なりたいたいという子どもが一人も出なかった。そのため、保育者のうち1名がどろぼう役になった。

〔劇遊びへの導入〕

①絵本、紙芝居、ペープサートをを用いて話す。

物語の始めの部分で、動物が泣いている場面には注意をむけるが、年老いて働けなくなって捨てられるので、ブレーメンへ行こうと考える場面には2クラスともほとんど関心を示さない。おんどりが食べられてしまうと言った場面のみ「食べラレチャウ」「カワイソウ」と反応があった。

「森の近くにやってきたところで、夜になりました。」と、まっ暗になった絵をみせると、子どもたちは「オバケガデルンダヨ」などと積極的に話を聞いている。

動物たちが大声で鳴いてどろぼうをおどかす場面では

保育者が促して、子どもたちに大声で鳴かせてみる。Bクラスでは、四種類の声を鳴いてみながら指導し、Aクラスでは、特に鳴き声を指導せずに、どろぼうをおどかさうということで、大声を出してみる。

どろぼうがびっくりして逃げていく場面、御馳走を食べる場面では集中し、保育者の働きかけに応じて、好きな御馳走をロ々に言い一緒に食べる真似をして喜んだ。

また、筋が複雑になり、時間も長くなりすぎるのではないかと考えて、どろぼうの子分が様子を見にもどってきて、動物たちにやつつけられて逃げて行く部分は削除した。時間は約10分。

②何も用いずに、保育者が、言葉、身ぶりで話す。

①と同様、年老いて働けなくなったのでブレーメンへ行くという説明にはどのクラスも関心を示さない。おんどりが食べられてしまうという部分ではしいんとして聞く。鳴いてどろぼうをおどかさう場面では、精いっぱい「ワーッ」「キャーッ」と叫び、おどかすつもりになりきっている様子である。保育者が、四種類の鳴き声を指導したクラスでは、動物の鳴き声で叫ぶが、おんどりの声はあまり聞かれなかった。どろぼうが逃げる場面、御馳走を食べる場面では子どもたちは喜び、御馳走に「タイヤキノ」の声が出て騒然となったりした。また、はじめの部分で、「猫が年をとってねずみがとれなくなったので……」と話していたところ、前日ねずみを見たという子どもが「死ンダネズミガイタ」と言い出し、「ボクモ、ネズミ、ヒカレテルノミタ」「ドブネズミ、イタヨ」「ミタコトアルモン」などとロ々に話し出して、ねずみに興味が集中することもあった。時間は約14分。

③なりたいたい役の顔を描いて、お面を作る。

保育者が登場人物を挙げながら、物語を思い出させて、なりたいたい役を選ばせる。《大きな大根》の場合と同様に登場人物と無関係な絵を描く子どももいた。(モモレンジャーなど)

〔劇遊びへの展開〕

場面ごとに整理し、第4表に示した。

第4表 《ブレーメンの音楽隊》劇遊びへの展開 約11分

場面	保育者の行動・働きかけ	子どもの行動
①ろばがブレーメンへ行こうと決心してでかける。	保育者T ろば役の子どもたちの中には、「年をとって働けなくなったのでごはんがもらえない。ブレーメンへ行って音楽隊になろう」と言う。	ろば役の子どもたち、保育者といっしょにセリフを言う。「ブレーメンへ行ッテ、音楽隊=ナロウ」の部分はだいたい言える。犬のところまで歩いていく。
②泣いている犬に会い、いっしょにブレーメンへ行こうとする。	保育者S 犬役の子どもたちの中には、「エーン、エーン」と泣く。Aクラスの場合「エーン、エーン」と泣く。Bクラスの場合「エーン、エーン、困ったな、困ったな」と言って泣く。	犬役の子どもたち「エーン、エーン」と泣いている。Aクラス ろば役「ドウシタノ？」にうまく答えられず、犬役は泣くだけ

場 面	保育者の行動・働きかけ	子どもの行動
<p>③泣いている猫に会い、いっしょにプレーメンへ行くことにする。</p>	<p>ろば「どうしたの？」犬「年をとって働けなくなって捨てられたの」 ろば「じゃ、いっしょにプレーメンへ行って音楽隊になろう」 ろばと犬とでカスタネットを鳴らし、子どもの楽隊。を歌って行進する。</p>	<p>Bクラス ろば役「ドウシタノ？」に犬役「年ヲトッテ捨テラレタノ」と言える。 保育者といっしょに、ろば役と犬役の子どもたちはカスタネットを鳴らして行進する。</p>
<p>④泣いているおんどりに会い、いっしょにプレーメンへ行こうとする。</p>	<p>保育者M 猫役の子どもたちの中にはいり「エーン、エーン」と泣く。 Aクラス「エーン、エーン」 Bクラス「エーン、エーン、困ったな、困ったな」 ろば、犬「どうしたの？」 猫「年をとってねずみがとれなくなって捨てられたの」 ろば、犬「じゃ、いっしょにプレーメンへ行って音楽隊になろう」 ろば、犬、猫でカスタネットを鳴らし行進する。</p>	<p>猫役の子どもたち「エーン、エーン」と泣いている。 犬役と同様に、Aクラスでは答えがずらずらで、Bクラスでは答えがでる。</p> <p>ろば、犬、猫、そろってカスタネットを鳴らし、行進する。</p>
<p>④泣いているおんどりに会い、いっしょにプレーメンへ行こうとする。</p>	<p>保育者T おんどり役の子どもの中にはいって「エーン、エーン」と泣く。 犬、猫と同様、AクラスとBクラスとではことばが違っている。 ろば、犬、猫「どうしたの？」 おんどり「年を取ったので食べられてしまうの」 ろば、犬、猫「じゃ、いっしょにプレーメンへ行って音楽隊になろう」</p>	<p>おんどり役の子どもたち「エーン、エーン」と泣いている。</p> <p>保育者といっしょにセリフを言う。</p>
<p>⑥四ひきがいっしょに歩いていくと、森にさしかかった頃夜になる。明かりをみつける。</p>	<p>保育者全員、子どもたちといっしょに、子どもの楽隊。を歌って行進する。 保育者T「夜になりました。くらくなってきたよー」「あぁそこに明かりがみえる、行ってみよう」 保育者M だろぼうに扮して衝立のかげにかくれる。</p>	<p>全員、元気よく歌い、カスタネットを鳴らして行進する。 子どもたち「イッテミヨウ」と言いながら、そろそろ家にむかって進む。</p>
<p>⑥一軒家を見つけてのぞいてみると、だろぼうが御馳走を食べている。おどかしてやろうと相談する。</p>	<p>保育者T, S 子どもたちといっしょに家をのぞく「あ、だろぼうがいる」 だろぼう役の保育者M「あーうまい、うまい、オレサマはだろぼうだぞ、むしゃむしゃ」と言いながら、ものを食べる動作をしている。 「相談しましょう」と子どもたちを集め、「いち、にのさんと鳴いておどかしてやろう」と大きなこそそ声でいう。</p>	<p>保育者といっしょに家の中をのぞいて「ドロボーダ」「ゴチソウタベテル」などという。 子どもたち、保育者のまわりに集まってうなづく。</p>
<p>⑦四ひきがいっせいに大声で鳴いておどかしたので、だろぼうは一目散に逃げる。</p>	<p>保育者T, S 子どもたちに「いち、にのさん」と声をかけ、四種の鳴き声で鳴く。 だろぼう役の保育者M、頭からふろしきをかぶって家からとび出して保育室の中を逃げまわり、ドアの外へいく。</p>	<p>劇遊びの導入のときに、鳴き声を特に説明されて鳴いてみたBクラスでは四種類の鳴き声で鳴く。 特に説明されなかったAクラスではおどかそうと大声で「ワーッ」とか「ギャーッ」と叫ぶ。 だろぼう役の保育者が家からとびだして逃げていくのを、子どもたちは大喜びで追いかける。</p>
<p>⑧だろぼうの残していった御馳走をみんなで食べる。 だろぼうの子分がもどってきてやっつけられる場面は省略する。</p>	<p>保育者T, S 「わあ、ごちそうがたくさんある。何を食べようかな」と子どもたちに言いながら食べる動作をする。</p>	<p>子どもたち「バナナ」とか「カレー」「アイス」などと口々に言いながら、食べる動作をする。</p>
<p>⑨音楽隊になって、歌いながらひとまわりする。 (原作にはない場面)</p>	<p>保育者T, M 子どもたちといっしょに子どもの楽隊。を歌って行進する。保育者Sはピアノで伴奏しながら歌う。</p>	<p>子どもたち全員、カスタネットを鳴らしながら、歌って行進する。カスタネットの鳴らし方がはっきりしない子どもも少しいるが、音楽にあわせて、楽しそうに行進した。</p>

IV 考 察

以上、二種類の物語による三歳児の劇遊びの実践を述べてきたが、登場人物と物語の構成という二点から考察を行なってみよう。

1 登場人物について

(1) 子どもたちのなりたい役は、犬と猫とに集中した。動物を飼うことが許されていない団地に住む三歳児にとっても、犬と猫とは生活の中でなじみのある動物なのであろう。さらに、テレビや絵本の中でも、多く擬人化されており、親しみを感じているからではないだろうか。このことは、日常的にはなじみのないロボについて、ていねいに説明し、子どもの中にある程度のイメージが生まれるような指導をした場合には、ロボになりたい子どもが、犬や猫と、ほぼ同様出てきたことからいえると思われる。

(2) 犬は男子、猫は女子が希望者のほとんどを占めている。〈ブレーメンの音楽隊〉では、犬はおじいさん、猫はおばあさん、と、絵本に性別が明らかにされているが、〈大きな大根〉の場合には、性別を表わす部分はどこにもなく、保育の中でも行なわれていない。テレビや絵本で擬人化される犬や猫が、犬は男性、猫は女性というパターンになっているために、そのことが三歳児の中に無意識にとりいれられているのであろうか。

(3) 全クラスを通じて、どろぼうになりたい子どもが一人も出てこなかったことは、興味深い。保育の他の場面では、どんなときでも、何人かはやりたいという子どもがいることから考えて、一人も出ないことが一般的な消極性を表わすものでないことは明らかである。一人もでないということは子どもたちに、^{*}どろぼう^{*}が悪いことをする人である、という認識があることと同時に、物語の展開を劇遊びとして楽しみ、役割を分担するというのではなく、自分が役になりきってしまうことを意味するのではないだろうか。その意味では、保育問題研究参考文献3、4の中で指摘している観る立場を考えた劇遊びというよりも、自己と役とが一体となるごっこ遊びであるというべきかもしれない。

(4) 子どもたちの役の選択は、登場人物の活躍の度合い、出番の多い少ないに関係していない。どちらの劇にも、特に登場人物の主演、脇役の区別はないが、はじめに登場する役は、その後もずっと出て、一番多くセリフを言うことになる。しかし、観せることを意識していないため、それらのことに関心をむけることはないであろう。

2 物語の構成について

(1) 物語の選択は、話の筋のわかりやすさ、動作が単純、くり返しが多い、登場人物の数が適切、役割が明確登場したら最後まで皆と一緒に行動する、主役と脇役の別がない、などの理由からなされたが、これらの理由の妥当性は、実践で確かめられた。この二種類の物語の選択は、三才児に適していた、といえるのではないだろうか。

(2) 役は単純で明確だが、それぞれ性格を強く表わしてはおらず、やっつけて役の違いが不明確になりがちであった。役割をとっていても、子どもたちは、何かの^{*}支え^{*}。がないとその役をいつのまにか忘れてしまう。お面が^{*}支え^{*}。のひとつのつもりであったが、お面はかぶってしまうと本人には見えないので、観る立場を意識していない子どもたちには^{*}支え^{*}。にはならないのではないだろうか。4月生まれで、お話の好きな女兒が、終わったときにお面をとって「ジブンニモドッチャッタ」と言ったが、これはむしろ例外的であり、他の子どもたちはそこまで達していないと考えられる。その点、それぞれの動物の鳴き声で鳴くという行動は、役になっているための^{*}支え^{*}。になるのではないか。しかし、実践でみたように、保育者の指導がくり返しなされないと、そのような場面でも、役を忘れて話の筋の中にはいりこんでいく。

(3) 物語の筋を運ぶ過程で、^{*}待つ^{*}。ことがでてくるが、動作もせりふもなく待っていると注意がそれてしまう。〈大きな大根〉では登場人物を呼んでから「ヨイショヨイショ」と引っぱるまでの間、先に登場した子どもはただ待っているの、注意が散漫になり、あきてしまう。〈ブレーメンの音楽隊〉では、ただ待つ時間はなく、歩いているので、その点では気持がそがれない。

(4) 劇遊びの中ではくり返しの部分を、リズム感のあるかけ声や歌、カスタネットで行なっており、三歳児が興味を持つ上で効果をあげている。

(5) 単純な筋でくり返しが多いことは、三歳児の興味にあっているが、一方、一番はじめの登場人物の行動がしっかりしていないとまとまりにくくなってしまふ。これは、ロボがしっかり根づいた場合と、特に説明せずに行なった場合とで、展開のしやすさが非常に違ったという保育者の感想からも、うかがえることである。

(6) 物語を展開していく上で、子どもたちの理解が得にくい事柄があった。そのひとつは、〈ブレーメンの音楽隊〉のはじめの部分の、年老いて働けなくなって追い出される、という箇所である。だんだん年老いて、身体が弱くなっていくという時間的経過に伴う生物の変化を理解することが三歳児には難しい、ということはおも

ろんであるが、核家族が多く、動物の飼えない団地の生活の中で、年をとった人や動物を、よく見たことがないということにも関連しているのではないだろうか。時々遊びに行ったり、来たりするかれらのおじいちゃん、おばあちゃんは、おそらく、にこにこして何でも買ってくれる頼りになる存在であり、年老いて働けなくなった姿とは結びつかないであろう。

理解困難なもうひとつの場面は、《大きな大根》の「大根が抜けた。」という箇所である。本来なら、この物語の山場になると思われるこの場面は、紙芝居やお話の中でも、子どもたちにほとんど無視されてしまった。これは、田や畑で作物ができ、それを収穫するのを身近に見たり、ましてやってみたりしたことがないという経験のなさ、運動会でやる綱引きと違い、ここでは実際のひっぱりあいをしていないこと、ひっぱりしている相手が大根の場合は見えないことによるものではないだろうか。芋掘りなど、土の中から作物を掘り出すような経験を子どもたちにさせること、また物語の中では大根が抜けたことを実感できるよう大根の抵抗をつくり、ひっぱり手応えを与えること、大きな音とか特別な動作などを工夫すること、などによって、この場面に対する子どもたちの反応も少しは変化するのではないだろうか。

(7) 子どもたちは、偶発的な事、目の前にある具体物に引きずられやすい。例えば、物語の筋には関係なく、「ねずみ。」ということばを聞いたことで前日に見たねずみの話へどんどん移っていくこと、犬の鳴きまねを始めると、這って歩きながら夢中になって吠えていること、道具としての大根に目をうばわれてわっとびついていくこと、などにそうした現象が見えられた。

(8) 原作にない場面をとり入れたことについては、食べる場面を作ったこと、皆で一緒にリズムにのって行進することなど、三歳児の興味をひき出す上で成功したといえるのではないか。《ブレーメンの音楽隊》では原作にあった子分がもどってきてやっつけられて逃げていくという部分を削除したが、追いかけてこの楽しさを巧みにとりいれたら、この部分を削除せずに、興味がひき出せるかもしれない、と考える。

V 結 び

我々が観察した三歳児においては、興味の持ち方は直接的であり、話の筋をいちおう理解しながらも、物語を自ら展開させていく力は持たない。保育者が中にはいり子どもたちと一緒に展開させていかないと、劇遊びはできないであろう。役割のとり方も、演技をするのではなくて、自分が物語の中にはいってしまうので、物語の展

開の中で役が要求されれば役になりきってしまうし、展開の中に役の性格が表われてこなければ、役をとることを忘れてしまう。こうした自分と役との分離が明確に出来ていない三歳児にとって、お面は、自分にみえないのであまり支えにはならない。また興味の持ち方が直接的で、物語の展開を見通して行動できないので、ひとつ興味をひく事物が出てくると、そちらにひきずられてしまう。理解の点では、子どもたちの日常生活にはないものの理解が困難であり、この点については保育のしかた、内容によって、かなり理解が進むのではないと思われる。興味の点では、繰返し、リズム感のある動作、食べることなどを劇の中に組み込み、三歳児の興味とエネルギーをひきだすことも、可能であることがわかった。文献によれば、同じ三歳児保育でも、観る立場を考えに入れて行動しようとする劇遊びを行なっている保育園もある。しかし、われわれの幼児グループは、毎日、長い時間集団生活を行なっている保育園や幼稚園と異なり、週二回、三時間ずつの保育であり、前者と比較して集団としては未熟であるといえる。

さまざまな条件の違いはあれ、子どもたちの興味と理解の内容を深めるためには、保育者の指導のあり方が重要であると考えられる。

参考文献

- 1 日本演劇教育連盟編：ちいさいなかまの劇あそび、鳩の森書房 1972
- 2 佐々木宏子他：絵本と創造性、高文堂出版社
- 3 季刊保育問題研究54号：新読書社 1975
- 4 保育問題研究 No., 245, 246, 248, 東京保育問題研究会 1976
- 5 ハンス・フィッシャー絵・瀬田貞二訳：「ブレーメンのおんがく隊」福音館書店 1964
- 6 レコード紙芝居、「大きな大根」、童心社